【用語】群馬郡足門村―群馬郡群馬町　参宮―伊勢神宮に参詣すること　一統―一同　奥書―本文のあとに記され、文書の内容を保証する文　印形―印、印判

【用語】天正十三年(一五八五)、イエズス会宣教師のフロイスは、日本人は「男も女も競って参拝する風習がある。伊勢に行かない者は人間の数のうちに加えられぬと思っているかのようである」と記している。これに加えて、伊勢神宮の御師(おし)による参宮の勧誘活動から生まれた伊勢講、さらには「おかげ参り」「ぬけ参り」といわれる風習がこれに拍車をかけた。とりわけ「おかげ参り」は、旅費・食費が無料とされ、領主や関所の規制もゆるかったので、伊勢参宮熱はだんだん高まり、甘楽郡宇田村(富岡市)の名主が記録したように、まさに「前代未聞之事」という熱狂的なものになった。

この文書は、沼田藩領に属した群馬郡足門村の天保十四年(一八四三)の伊勢参宮許可願いである。金左衛門の倅金六をはじめ一四人が、農間期の十二月十八日に足門村を出立して伊勢神宮を参拝した後、京都・大坂から奈良に行き、高野山から吉野山の神社をめぐり、さらにその他の神社仏閣を拝礼し、翌年の二月上旬に帰って来るという日程である。伊勢参宮の場合、伊勢山田の御師の家に泊まり、翌日外宮や内宮を参拝するのが一般的であった。そして参宮見舞いを寄せてくれた人々へのお礼の意味を込め、手ぬぐい・風呂敷・絵図・煙草入れ・扇などを購入して土産として配った。